

実証明書を後日のため頂いた。

ただいま苦勞の一端を思い出して事實は事實として申し上げましたが、私達のシベリア抑留は第二次大戦中の小さな歴史であるかも知れないが、決して忘却してはならないのであります。単に遠い苦しい思い出として語る事ではすまされないのであります。

飢餓と酷寒の苛酷な重労働でたちまち多くの日本人の命が異国の果てに奪われていった。この極限の生活を生き抜いて奇跡的にも祖国の土を踏むことが出来た私達はまことに幸運であったと思わざるを得ないのであります。まことの生き証人であります。

しかも四十年もすぎた今なおシベリア抑留者の中に、鉱山での強制労働により健全であった五体は蝕まれて、シベリアの傷痕は体の奥深く刻み込まれ、病状は進行し、病魔に冒されているシベリア引揚者の苦しみがあつる事も決して忘れてはならないのであります。またシベリア抑留の後遺症でシベリア珪肺、じん肺でありながら知らずに家族と共に世を憚りながら暮らしている人々、この事が原因で入退院を繰り返して一人前には

何も出来ず、労働も出来ず、ただ迷惑者あつかいされている引揚者老人がいる事も忘れてはならないのであります。

重い飯盒、中味は石

千葉県 富田 美德

昭和二十年十二月一日、ソ連領に入った。すでに酷寒（零下）で刃りは雪一色、空は灰色に曇り西も東も判らず、只只黙々と行動を続けるのみであった。それは、ひたすらに故国へ帰れると思いつながらである。しかし、何か一抹の不安が脳裏をかすめた。徒歩で一日半ばかりして名も知らない駅に着いたら、真黒な有蓋貨車が数十車両とまっていた。すると直ちに乗車せよとの命令が届き、それぞれ編成毎に乗車、あらぬ方向へ走り出した。

貨車の中は暖房が無く、一車両に四十人位が体をくっつけながら暖をとった。帰国するのにどうしてソ

連領に入ったのか、お互い疑問に思い始めたが、どうすることも出来ない。列車は只、雪の原を走るだけである。食糧は「乾パンと水」だけである。

こうして何日か過ぎた或る日、突然大海原が見えてきた。お互いに肩をたたきながら喜んだが、それは東の間、海ではなく「バイカル湖」であることがわかった。喜びは一変して失望のどん底に落とされた。皆無口となり、半日ほどして「バイカル湖」も見えなくなった。やがてソ連兵士の監視の下に行動し、二時間位歩いた。着いた所には雪に埋もれた幕舎が幾棟か並んでいた。これが私どもの宿舎であった。

編成順に舎内に入れられたが、内部は外気と変わらぬ温度であった。情報によると、当分の間、ここを本拠として作業をすることである。翌日より作業班が編成され、一個班は二十人から三十人位であった。

(1) 驚いた食事のこと

燕麦のスープ（燕麦の量は少なく水のように）（飯盒の三分の一位）

黒パン一切れに大匙一杯の白砂糖、これが朝食であ

り、昼食も夜食も同じであった。

(2) 作業の内容とノルマ

最初は或る工場を解体した資材の整理であった。鉄骨その他の資材が雑然と置かれ、その上は雪に覆われているので、順序として先ず雪を除去し、品物を確認して、これを種類別に片付けるのである。外気は零下十度から三十度位の間であり、鉄材が多いので共同での運搬が多く、作業はなかなか捗らない。ソ連の監督はしきりに「ダワイ、ダワイ」を連発して促すのであるが、長途の旅と食糧不足のため、充分の力はず、ノルマは極めて低劣であった。

(3) 病人の統出

連日の疲れと栄養不足のため、倒れる者がだんだん増して来た。医療機関や施設が無いので、このような者は宿舎の中で休んでいるだけなので死亡する者も出て来た。如何に飢えていたかの一例を挙げると、毎日作業現場に向かう途中、道路にレンガが落ちていると、黒パンかと思つて一斉に飛び込む姿である。今思い出してもゾツとする哀れな姿であった。

酷寒の冬が過ぎ春ともなれば、一応ホッとするところだが、依然として食事は変わらないので、道路わきに芽生えたタンポポ、アカザ、鬼アザミなど食べられそうな野草を摘みとって食べた。飯盒で茹でて、石で砕いた岩塩をふりかけて食べるのである。満腹感を味わうことは勿論だが、ビタミンの補給にもなったかも知れない。

作業は春から夏にかけて建築、鉄道路盤工事、農場作業と逐次変わっていった。やがて冬が近づくと、森林の伐採、炭坑作業、開発のための諸作業等直接雪に関係ないものへと変わっていった。

こうして春夏秋冬を三度繰り返した。その間、栄養失調で倒れた者、伝染病（パラチフス等）で死亡した者、凍傷で苦しんだ者、作業中に負傷した者等、枚挙にいとまがない。

昭和二十三年五月二十五日、舞鶴に上陸した時は、これでやっと故国へ帰ったんだなと自分で自分に言い聞かせた。同時に日本の土を踏むことが出来なかった同志のことを思い、何と遺族に説明したらよいかに

迷った。

抑留中、今もなお、絶対に忘れることの出来ない一事を話す。それは作業大隊長と私が二人で営倉に入られたことである。理由は作業ノルマが達成されず、その責任を問われたものであった。営倉には灯りがなく、暖房の施設もない。外の薄あかりで五日間を過ごした。或る日の食事時、飯盒が特に重いので喜んで蓋を開けたら食糧ではなく石ころが入れられてあった。ソ連監視兵の単なるいたずらか、それとも中の糧食を盗みとったか、何れにしても冷酷極まりない仕わざである。永遠に脳裏を離れない人道上の問題である。

抑留、凍傷で潰えた爪が

三十年後再生

千葉県 兼平 正二

昭和二十年八月、私の所属部隊は中国の山海関より満州国新京に向かって移動していた。新京着後直ちに